

## 島津さん、ありがとう

二松學舎大学文学部専任講師 張 佩茹

今でも目を閉じれば、満面笑みの島津さんがまぶたの裏に焼きついてるように鮮明に映ります。訃報を受けて半年以上経っていますが、いまだに事実として受け止めきれない気持ちが残ります。昨年、日本中国語学会の第66回全国大会の折に立命館アジア太平洋大学で島津さんにお会いしました。そのとき伺った話では、秋より1年間在外研究に入っていて、この貴重な研究休暇を活用し、じっくり勉強したいとのことでした。実際に私の知る限り、島津さんは研究休暇に入る前の2016年7月に『漢語与漢語教学研究』第7号に論文を発表し、続いて在外研究に入ったあとの今年に『楊凱榮教授還曆記念論文集 中日言語研究論叢』にも論考を寄せました。研究者としてこれからも成果を世に送り続けることが期待される矢先に逝去されました。残念で仕方がありません。

初めて島津さんに話しかけたのは、2007年の夏に軽井沢で行われたゼミ合宿だったと記憶しています。ゼミ合宿といっても、実際に島津さんと私は同じ大学に通ったわけではありません。島津さんは当時、すでにお茶の水女子大学大学院の博士課程を修了されていますが、私の指導教員である東京大学の木村英樹先生の授業に参加していたというご縁があってゼミ合宿に呼ばれたようです。そのとき、島津さんとは初対面だったのに、その親しみやすさに惹かれて、しばらく相部屋の和室で2人で雑談をしました。そのなかで、なぜ中国語の文法研究の道を選んだのか、という話題に触れたとき、島津さんから大学卒業後、通訳・翻訳の仕事に就いたが、仕事をしているうちに中国語の文法に興味を感じるようになって大学院で本格的に研究することを決意した、というお話を伺いました。私自身はストレートで大学院に進み、インターンシップは何回か

体験したものの、社会人経験はゼロに等しいので、実際に社会人経験を積んだあと大学に戻った島津さんのお話は興味深かったです。そのお話を聞いて、自分が好きなことが見つかったとき、たとえ世間の目でそれは遠回りしたことだとされても、ぶれずに自分の目標を立てることが重要だと思いました。

これを機に、その後、研究会などでお会いした折に挨拶を交わすようになりました。島津さんは動詞の複文における文法化の現象に興味を持たれ、「等 A、B」構文における“等”の文法化」と題した論文を発表しました。私自身は視覚動詞が複文において、どのように原因や理由を表すマーカーへ文法化しているかについて考察していた時期があるので、研究テーマの類似性により島津さんと共通の問題意識をいくつか持っていました。そのため、文法のあれこれについて話すときも共感するところが多かったです。また、私からみると島津さんは先輩であるため、困っていることがあるとき島津さんに相談することもしばしばありました。そのつど、島津さんは親身になって相談に応じてくださいました。約2年半前のことでしたが、私は現在の所属先に着任した初年度に、一年生向けのリレー講義のひとコマを担当することが決まっていることを知らされ、心配になりました。というのも、それまで語学の授業しか経験していない私にとって、これは大きなチャレンジでした。どのような内容を準備すれば、大教室で学生に飽きさせない90分の講義授業ができるのか、見当が付きませんでした。たまたま研究会で島津さんに会う機会があったので、その悩みについて相談しました。そうしたら、その場でアドバイスをくださっただけでなく、後日、実際にリレー形式の授業で使用したプリントまでメールで送付してくださり、そのときはこういう話をされていて、学生の反応はこうだった、ということを詳しく教えてくださいました。そのおかげで具体的なイメージがわき、講義の準備に取り掛かり、無事に初年度の一大仕事を乗り越えることができました。

もう一つ島津さんに大変お世話になったことは、博士論文の例文の和訳の校正でした。丁寧に書かれた丸みのあるその筆跡が、博論を仕上げる時期に私に優しく語りかけてくれました。「このままでも構いませんが、私だったらこう書きます」のようなコメントまで付けてくださり、彼女の謙虚な性格が染み出ていました。

ここ数年、互いに年賀状を送るようになり、研究会だけでは知り得ない一面を伺うことができたと感じました。そこには、日々の生活に楽しみや喜びを見つけ出そうとする島津さんの姿がありました。島津さんから届いた年賀状には、京都の四季の美しい写真とともに、読む人がにっこりする近況報告が書かれていました。京都でさまざまな散歩コースを開拓したことや、近所に猫の知り合いができたことなど、短いながらもユーモアのセンスが光る文章でした。

これまで、ときおり島津さんから中国語の用例の適格さについて尋ねるメールが届きました。論文を構想する段階で、島津さんは複数の母語話者に用法を確認するようになっていたようです。また、こちらの返答を受けて、さらに関連する質問が出てくるときもありました。そのやりとりのなかで、私自身は普段見落としていたことに気付くときもあり、とても勉強になりました。もうそのようなメールは届かないと思うと、寂しい限りです。

人生ははかないものだ、ということはある程度心得ているつもりですが、突然の別れはやはり悲しいです。島津さんがこの世を去ったことは、私にとって尊敬する先輩のひとり、大切な研究仲間のひとり失ってしまったことを意味しますので、大変残念に思います。しかしいっぽうで悲しみよりも島津さんに出会えたことに感謝する気持ちのほうが勝ります。島津さんのおかげで私の人生の風景がより豊かになりました。島津さん、ありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

